

再び平家物語南都本について

高 橋 貞 一

一

平家物語南都本については、拙著、「平家物語諸本の研究」（昭和十八年刊）に於て、その大略に就いては述べたのであるが、他の諸本についても研究が進展して来た現在に於ては、更に詳細な考察が必要であるのでここに筆を進める所以である。この平家物語南都本は、昭和四十六年十月、古典研究会より刊行せられ、研究が極めて容易になったので、体裁等は再説しないが、彰考館文庫蔵、卷二・三・四・五の四冊を欠き、室町末期以前の書写である。

この書が平家物語諸本の中に於て如何なる位置を占める伝本であるか。平家物語異本の流伝上重要な伝本である場合は是非とも詳細に検討することが肝要である。拙著に於て十二卷本に対し、増補せられた伝本として位置づけをしたのであるが、如何に増補せられ、如何なる性格を有するか検討を加えたいと思う。凡そ平家物語の十二卷本、例えば一方流の覚一本は、「応安三年十一月廿九日 仏子有阿書」の奥書があるが、鎌倉初期まで遡るべき伝本といへば、それに対して八坂流本（城方流とも）は、覚一本に近い伝本とそれに遠ざかった伝本に於て、甲・

乙・丁類と分類せられる。そして一方流本は流布本に至る間に、次第に改訂流伝した跡を辿ることが出来る。従って八坂流本に於ても平家琵琶の伝流を考慮するならば、一方流の如く、新古の流伝が存在した筈である。筆者はこれを甲・乙・丁類と名づけたのである。現存の平家物語の伝本は平家物語伝本の極めて少い一部である。故に一伝本を考察する場合にも、同類本の存在を予想すべきである。然るに平家物語研究者が一本をとってこれを根本的な伝本と考察する場合は十分に配慮することが肝要である。従って類を以て比較検討し、漸次変化流伝した跡を辿ることが重要である。この点屋代本平家物語を以て基本とする考説には賛同し難い。

さて本書が増補せられた伝本であるとすれば、如何なる本を基としたものであろうか。拙著に述べた如く、卷一以下の特質をあげると、

卷一

鱸の事（清盛熊野詣） 無

則天武后の事（二代后） 有

二条院鶴事（頼政御興振） 有

卷七

木曾元服（廻文） 無

額入道西寂事（飛脚到来） 無

卷九

範光歌（山門御幸） 無

卷十二

建礼門院吉田入御同御出家 有

建礼門院大地震にあふ事 有

建礼門院大原入御事 有

大原御幸同御往生 有

などがあげられよう。これらは八坂流甲類本の特質である。即ち本文が一方流覚一本に近いこと。灌頂巻を有しないことがその性格特質である。従って卷一以下の本文が覚一本に類して居れば、本書の底本は覚一本に近い八坂流の伝本を基として増補せられたと認むべきである。

二

次に各巻に就いて詳細に述べることにする。

卷一、本文は書き続けで章段がないが、比較上、一方流本の章段名を用いることにする。祇園精舎と殿上闇打とを、巻頭の目録に、忠盛朝臣昇殿事とするのは、平家物語八坂流乙類本の題目と類する。祇園精舎に、

国香ヨリ以来、貞盛、惟衡、正度、正衡、正盛ニ至マテ六代

とある。貞盛以下四人は他の一方流本、八坂流本になし。長門本あり。殿上闇打では、忠盛が、「一尺三寸ノサヤ巻ヲヨコタヘ指タリ……」は、左兵衛尉家貞の次の次に出し、一方流本と順序が反対である。こうした記事の順序の相違は平曲の語りの影響を示すものであろうか。章段の相違は更にその顕著な差違であらう。次に、季仲卿の次

に、

又季仲卿ニナラヒタリケル殿上人ハ、ケシカラス色ノ白カリケレハ、其ヲモ五節ニアナ白／＼イカナル人ノハ
クヲオシケントハヤシケリ。

とある。長門本同じ。鱸の章のはじめ、忠盛の歌がない。本書の脱した所であろうか。清盛の熊野参詣の事がな
い。これは八坂流甲題本以下の八坂流本にない所である。我身榮花では、左右近衛大將事に、

内丸内大臣左大將、田村丸大納言右大將、其ヨリ後兄弟左右に相並フ事

とあり、十二卷本になく、長門本にあり。清盛の八人の娘について、花山院右大臣ノ御台盤所に、

然ヲイカナルアトナシ物カ説タリケン、四足ノ門、

花ノ山タカキ梢ト見エシカトアマノコナレヤフルメ拾フハ

此北方ハ成範卿ニハ八歳ヨリ申名付ラレタリケレトモ、未タ少ク御座ケレハ、サマテノ事モナカリケリ。

とある。長門本に類し、八坂流乙類本にはこの歌を有するものがある。祇王では、はじめに、

太政入道、朝恩ノアマリニ、京中に其名ヲエタル白拍子共ヲ集テ、西八条ニテ遊覧アリ。イツレモオトラヌ者
共ヲ並居テ、入道歌ウタヘト宣ヘハ、面々声々ニ祝ノ歌共ウタヒケリ。蓬萊山ニハ千年フル、万歳千秋マシマ
セハ、松ノ上ニハ鶴スクヒ、岩ノ上ニハ亀アソフト、加様ニウタヒタリケレハ、入道イト、タエスソ思ハレケ
ル。

とある。この語は他本と異り、今様は盛衰記卷十七の祇王の章の語と類する所がある。仏の歌に、

入道又乱拍子舞ヘト宣ヘハ、一時ハカリ舞スマシテ、セメノ和歌ニハ、ヨシサラハ心ノマ、ニツレナカレ、憂

ニツケテヤ思ヨハルト押返く三反ウタヒテセメヲフム、形ハ人ニ勝テ、舞ノ手モ日比秘藏セラレタル、祇王
ニモ今一キワマサリタリケレハ

とある。盛衰記の歌と類する。又仏の歌に、

仏又歌ウタヘト宣ハ、仏トリアエスソウタヒケル、

君ハ万歳マシマセヨ、我等モ御影ニサフラハン、ツルト龜トノヨハイニハ、幸ヒココロニマカセタリ

其後入道押返シ、祇王ニ今一返トシヒ給ヘハ、祇王涙ニ咽ヒテ、物モ申サス、良有テ、又加様ニソ歌ヒケル、

君カアケコシ、手枕ノ、アケテ久ク成ヌカナ、何シニ月ノ、ヤトリケン、ナカラヘスマヌ物故ニ

ウタヒタリケレハ、女房達侍共、伝ヘ聞、ツキ様ノ者マテモ皆涙ヲソナカシケル。

とある。この今様歌も盛衰記に見えるものである。かくみると、祇王の章は盛衰記の影響があるといふべきである。

二代后では、則天武后の事がある。これは八坂流甲類本にある所で、又盛衰記、長門本、延慶本等にもある。長門本が古きか。二代后の入内の条に、

殊更色アル御衣ナントヲハメサ、リケリ。白御衣十五ハカリソメサレケル。内ヘ参ラセ給シカハ、臆テ恩ヲ承
ハラセ給キ。

とあるのは、八坂流甲類本に類する（龍門文庫藏本卷一、大山寺本、屋代本）。「知サリキ憂身ナカラニ」の歌の
次に、

又此度殊ニ時メキ給テ、世ノ誇リニモ成ニケレハ、別当入道惟方ト聞ユル人、楊貴妃ノタメシ出キナントスト

申ケルヲ、三河内侍キ、テ、オロノ、申出シタリケレハ、御硯ノフタニ、

道ノヘノ草ノ露トハ消ヌトモ浅茅カ原ヲタレカ問ヘキ

ト遊シタリケルヲ、御門御覽シテ、御返事ハナクテ、チカワセ給フ御事有ケリトナン。

とある。他本に無い所である。

額打論では、

御位ヲ退賜テ後、僅ニ卅余日ソ坐ケル。其後二条院トソ申ケル。同八月七日、広隆寺ノ丑寅蓮台野ノ奥船岡山ニソ収奉ケル。八条中納言長方卿、其時右大弁宰相ニテマシノケルカ、御葬送ノ御幸ヲ見奉テ、悲ノ余思ツツケラレケルトカヤ、

常ニ見シ君カ御幸ヲ今朝トヘハ帰ラヌ旅ト聞ソ悲キ

忠胤僧都カ秀句モ此時ノ事ナリ。七月廿七日ハ如何ナル日ソヤ、去ヌル人帰ラス、広隆寺ハ如何ナル所ソヤ、御出有テ還御ナシト哀ナリシ事共ナリ……。

右の傍線を付した所は、はじめの所は八坂流甲類本の本文に類する。次の「常に見し」の歌は一方流本は卷六、高倉院崩御に出す歌である。その作者は澄憲である。千載集卷九によれば、二条院崩御の時の澄憲の歌である。本書はその異伝であろうか。額打論において、勢至房の装束を述べて、

勢至房ハ附子縄目ノ腹巻ニ、黒漆の太刀ヌキ、二人ツト走出テ、

とある。この傍線を付した所は八坂流甲類本の語である（大山寺本、屋代本）。清水炎上の章では、

壁ニ耳石ニロト云事アリ、オソロシノトソ申ケル。抑清水寺ト申ハ、昔大和国子嶋寺ニ賢心ト云ケル僧マシ

くケリ……（清水寺縁起）

とある。これは大略盛衰記卷二の文と同一である。従つて盛衰記によつたと認むべきであらう。殿下乗合の後白河院の御出家の条には、

一院後白河院御出家アリ。御年四十一、御戒師ニハ三井寺ノ前大僧正覺忠トソ聞ヘシ。今生ハ十善帝王ノ御位ヲフミ当来ハ九品往生ノ直道期シ給コソ目出ケレ。

とある。一方流本なし。本書の増補か。殿下乗合の次に、重盛の夢想、無紋の沙汰がある。これは諸本は卷三、無文沙汰と一部関係があるが、他は他本にない所である。

鹿谷の章では、重盛宗盛兄弟が大将になつた事を述べて、

次男マテ打ツ、キ並給フ。近衛ノ大将モ輕クナル。凡人ノ中納言大将ハ有カタキ事ナリ。世ニハ又人有トモ見ヘサリケリ。昔平城天皇ト嵯峨天皇ト御合戦ノ時、大将軍坂上田村丸、平城天皇ヲ責落シ奉リタリシ、勳賞ニコソ、中納言ノ大将ニハ成レタリケレ。此外ハ先例希也。五条中納言邦綱卿、大納言ニ成給フ。歳五十六トカヤ。

とある。他本にない所である。俊寛の性格を述べた次に、後徳大寺の敵嶋詣である。叙述の順序からいえば、ここに後徳大寺敵嶋詣を述べる伝本は八坂流乙類本のみで、甲類本は卷二の最後、一方流諸本は卷二の成親死去の項に述べている。平曲流伝の上から相違が生まれたものであらう。後徳大寺実定の許を訪れるのは、一方流本八坂流本共に、藤藏人大夫重兼（藤）であるが、本書は、後藤左衛門尉親範とある。長門本卷一には、源藏人大夫賢基、盛衰記は卷三には、佐藤兵衛尉近宗とある。実定は敵島へ詣る前に春日社に参拝する。

先春日社へ詣給へハ、三笠ヲサシテ出給フ。思深草ノ藤森、伏見ノ里ノ明ホノニ、宇治ノ川瀬ヲ見渡セハ、憂
 キ世ニ廻ル水車、アシロニ懸ルヒヲマテモ、心細覺ツ、出ノ里ナル歎冬モ、イハヌ色ヲ顯テ、春ノ風ニ綻
 ヒ、流モ清キ泉河、ケニソ川風スサマシキ福業ナラム山越テ、心ヲ懸ル春日野ノ、飛火ノ野辺ニ鳴鹿ノ思フカ
 イヨト知ヘシテ、三笠山ニ付給フ。比ハ三月半ノ末ナレハ、山葉出ル月影ノ、ミトリノ榊ニウツリツ、藤ノ
 目クミニ至マテ、深ク頼ヲ懸ニケン、神女一人影見ヘテ、靈託頼支カリケレハ、則帰洛セラレケリ。
 とある。他本なし。又実定の下向の時、内侍共が名残を惜しむ条に、

其中ニ有子ノ内侍トテ生年十五ニナルアリ。……有子申ケルハ、サンサフラウ。一人モ当国ノ者ハ候ハス。皆
 他国ノ者共ニテ候。童ハ近江国野洲ノ郡ノ者ナリシカ、十二歳ヨリ此社ニ居置レテ侍フト申ス。御覽スレハ歳
 十五ハカリナルカ、形チ人ニ勝レ、未タ物ナレサル気色ナレトモ、ワリナク思食レケルニヤ……有子はヲ見レ
 ハ歌ナリ。

山ノ端ニ契テイテム夜半ノ月廻リ相ヘキ時ハシラネト

有子はヲ給テ、自打アカメ返事ニモ及ハス……。

とある。有子内侍の事は、盛衰記卷三に見える所であるが、右の傍線を付した所は盛衰記には見えない。本書と盛
 衰記と記事内容にもかなりの差がある。然しとにかく盛衰記を基として書かれたと認むべきであらうか。願立の章
 では、後二条関白の母北政所の祈願の条に、

内大臣殿ノ今度ノ寿命ヲタニモ助サセ賜テ候ハ、八王寺ノ御前ヨリ十禪師ノ御前マテ廻廊ヲ作テ、大衆入堂
 ノ時、風雨ノ難ヲ除ヘシ。次ニ三千人ノ衆徒ニ毎年冬小袖ヲキセ申サン、又一期ノ程参籠シテ、下殿ニ並居タ

ル宮籠共ニ相伴テ宮仕ヘ申ヘシト、御心中ニ願ヲ立サセ給テ人ニモ仰ラレス、物狂共ニウチマキレテ御座ケルニ、出羽ノ羽黒ヨリ三善ト云ケル神子二人上テ、同ク御社ニ籠タリケルカ、俄ニ大庭ニ狂出テ、一時ハカリ舞テ絶入シタリケリ。

とありて一方流本等の御願と甚しく異なる所がある。次に御輿振の章の前に、

安元三年三月五日妙音院殿内大臣ニテ坐々ケルヲ太政大臣ニ成給。……宇治ノ悪左府ノ御例其憚アリ。

とある。これは、一方流本では、鶺鴒合戦の章の「北面は上古には無かりけり」の前に来る条である。この点も八坂流甲類本と類する（屋代等）。御輿振では、二条院の時の鴛鴦の事がある。屋代本も同様であり、長門本も同じく、八坂流甲類本には竹柏園旧蔵本（佐々木博士）も又同じく、四部合戦状本も同じく、注目すべき条である。神輿を射た武士の名は、

平利家、同家直、藤原ノ久通、同成直、同光景、俊行等ナリ。是ハ皆小松殿ノ家人也。

とある。一方流寛一本のものと異なる所である。これは長門本によって書いた如くである。内裏炎上の次に、十二巻本の座主流が続く。その内に、

藤井松枝ト云俗名ヲ付テ、遠流ニ定マリニケリ。如何ナル者カ読タリケン、其比ノ歌ナリケリ。

松枝ハ皆サカモキニ切ハテ、山ニハサスニスヘキモノナシ

とある。この歌は盛衰記によるか。長門本の歌は、「松枝は皆さかもきになりはてて山にはさすにするものぞなき」とある。明雲座主の拝堂の事なく、山門の大衆会合歛議には、

伝教慈覚智証大師ノ御事ハ申ニ及ハス、義真和尚ヨリ以来……（長門本盛衰記あり）

再び平家物語南都本について……

とあり、一方流本の鶴丸にあたる条には、

西塔法師ニ善覺房堅者長胤ト云惡僧ノ具シタリケル童、甲冑ヲヌキステツ、社壇ニ打上テ身心ヲ苦シメ五体ニ汗ヲ流シテ

とあり、長門本は、「無動寺ぼうしに乘円律師の童べに生年十八に成けるが」とあり、盛衰記は、「白髪たる老女」とある。卷一の最後は、西光被斬の章の、

前座主ハ大衆ニ心アランナリ。イカニ成ナンスル我身ヤラントソ思食シ煩ハレケル。其中ニモ猶イカメ坊斗ソ二心ナクソ仕エ奉ケル。

で終る。この分割は他本に例を見ない所である。

次に卷二、卷三、卷四、卷五の四冊を欠くので、卷の分割や詞章の変化を見ることが出来ないが、八坂流甲類本に近い十二巻を基として長門本、盛衰記によって補訂改作したと認むべきであらう。

卷六、一方流本卷五の早馬の章より始まる。

同九月二日東国より相模国ノ住人大庭三郎景親福原へ早馬ヲ立テ申ケルハ……

とある。他の諸本が卷五の記事であるのに対し、本書が卷六とするのは注目すべきであるが、前の巻々が不明であるので理由を見出す手がかりがない。

若キ公卿殿上人ハ、早サラハトクシテ事出来ヨカレ、討手ニ向ハンナント云ケルソハカナキ。畠山カ三浦ト軍シタリケルコトハ、父庄司次郎重義、弟小山田ノ別当有重、宇都宮左衛門朝綱三人在京シテ居タリケルヲ助ケンカ為トソ聞エシ。是等三人大番ノ為ニ上洛シタルケルヲ、太政入道イキトフリテ、彼等ヲ召寄テ、汝等源氏

ニ同意セシト云起請ヲカキテ進セヨト宣ヘハ、是等七枚宛起請ヲ書テ奉ル。小山田ノ別当申ケルハ、
とある。この詞章は、屋代本に類し、八坂流甲類本の文に近い。朝敵揃にも、

皆頭ヲ獄門ニ懸ラレ骸ヲ山野ニサラス。南蛮北狄東夷西戎新羅百濟天竺辰旦ニ至ルマテ、我朝ヲ背ク者ナシ。

コノ比コソ皇威モ無下ニ輕ケレ。

とあり、百二十句本、屋代本に類する。咸陽宮では、

君子ハ刑人ニ不近付トテ、色々トサハキケルニ、先ニ上ル荊訶是ヲ顧ミテ申シケルハ、翫其磧礫不窺玉淵者
ハ、不知驪龍之所蟠、不見上邦者ハ、未知英雄之所宿。タトヘハツチクレヲ翫フ物ニスル程ノ者ハ、玉ニ望ナ
ケレハ、難隱、跋難陀等ノ龍ノワタカマル淵ヲモ不知、アヤシノ柴ノ庵リニスミナレタルシツノヲハ、花ノ色
コノ九重ノ有様ヲ見ナレサル故ナリトイサメケレハ、官軍其時色ヲ直シテシツマリケリ。

とある。これは長門本卷九(三二三頁下)に類する。恐らく長門本によつたと認むべきであらう。盛衰記にも類す
る所である。文覚荒行の章では、発心の由来を述べている。その相手の女性としては上西門院の雑仕、阿津磨と申
す美女である。それに通う男は、志深き男とあるのみで名をあげない。長門本は、衣河殿の娘で、夫はわたる左衛
門尉である。盛衰記も、源左衛門尉渡で、衣川殿の娘である。本書のみが特異な説話である。文覚流罪の次、伊豆
院宣の章に、頼朝と文覚との対面を詳しく述べる。文覚の弟子、学文房の事があり、

小松殿ニ繼テハ御辺ソ大果報ノ人ト見奉ル。文学カ左ノ目ハ大聖大動明王ノ御眼、右ハ又孔雀明王也。人ノ果
報ヲ空ニ知テ、日本国ヲ見事モ掌ノ中ナリ。ヨモ違候ハシ。早々ハケ国ノ家人共催テ、謀叛ヲ発シ、……

とあり、傍線を付した所は、長門本の文と類する。院宣の文は、一方流本と異り、長門本所載のものと殆ど同文で

ある。盛衰記は又十二卷本、本書と異なる所がある。次に源氏追討の官符がある。長門本卷十一、盛衰記卷二十二所収のものと類する。次に新院嚴島御幸の事がある。

九月廿一日新院又嚴島へ御幸アリ。御共五条大納言邦綱、藤大納言実国、前右大将宗盛、源宰相中将通親、藏人頭重衡、安芸守在経、宮内少輔宗範ソ参給ケル。去三月ノ御幸ニハ、法皇ノ御事ヲ祈申サセ給ハントテヤ覽ト人申シ、ニ、五月ニ鳥羽殿ヨリ京ヘ入ラセオハシマシキ。入道相国モヤウ〳〵思ナラルナント聞ヘシカハ、彼御幸ノ注シニヤト覺テ、其御悅申サルヘシ。サシモ深キ御志神明モ争カ御納受ナカルヘキ。御願文モ御身ソカラアソハシタリケレハ、摂政殿ソ清書ハセサセ給ヘリケル(御願文なし)。

これは盛衰記卷二十三の新院嚴島御幸事を簡略にしたものである。長門本とは関係が無いと認められる。富士川の章では、薩摩守忠度と女房との和歌の贈答の条は、一方流本と異り貞盛の将門追討の事の後に述べている。十月六日新院嚴島還幸、廿日頼朝浮嶋ガ原へ進出した由を述べて、次に、

廿二日入道相国ハ夢野ト云所ニ新ク御所ヲ立テ御渡アルヘキ由申サレケレハ、法皇ソレヘ渡ラセ給フ。御輿ニテソアリケル。御共ニハ左京大夫修範ハカリソ被参ケル。イマ〳〵シキ御名アリツル福原ノ御所ヲ出サセ給コソ返々目出キ。是モ偏ヘニ嚴嶋ノ御幸ノ御注シニヤトソオホユル。今事ノ外ニ入道思ヒ直ヲラル、ニコソ。

とある。これは長門本卷十一の新院嚴島還幸の条の文(三七二頁下)によつたものである。実盛の京上りを述べて、次に、

サル程ニ其日ノ暮程ニ兵衛佐ノ許ヨリ新先生ト云雑色ヲ牒ノ使ニテ、平家ノ陣ヘ申送ケルハ、優曇花ト親ノ敵トニ合事ハ有カタキ事ニテ候ナルハ、程近ク御下リ候ナルコソ返々悦存候へ。明日早旦ニ見参ニ入ルヘシト申

送ラレタリ。是ヲ聞テアケタリケル幔幕共皆オロシテケリ。此返事イカナランス覽ト相待ケル所ニ、返事ニモ及ハスシテ、新先生ヲ擲取テ頸ヲ切ル。件ノ使ハ祇園ノ御靈会ニ三条ノ大路ヲ渡ル様ニシヤウソイテ、当色キセタル者八人具シテソ向タリケル。兵衛佐是ヲ聞給テ、昔モ今モ牒ノ使ノ頸切ル事未タ聞ス、今ハ平家運ツキタリト宣ヒケルハ、軍兵弥兵衛佐ニ帰伏シタリケリ。

とある。これも長門本卷十一の文（三七頁上）である。又遊君の口詠みは、

富士川ニヨロヒハ捨ツスミ染ノ衣タ、キヨ後ノ世ノタメ

この一首を先ず出し、他は後に出す。次に義経来会の事を述べて、

其夜兵衛佐ハ、猶浮嶋カ原ニ陣ヲ取テ御座シケル所ニ、歳廿計ナル若武者ノ実ニキモくシケニ顔^{ツラタマシ}神人ニ勝レタリケルカ、乗替キヨケケニテ、兵衛佐ノ御座ケル陣ノ前近ク打寄テ馬ヨリオリ、大勢ノ中ヲカキ分テ、見参ニ入サセ給ヘ殿原トイハセタリ……。

とある。これは盛衰記卷二十三の義経軍陣来事に類する文である。次に、十一月十一日、邦綱卿が里内裏造出した由を述べ、十五日東征將軍の上洛に及ぶ。この所に、「平屋ナルムネモリ」、「忠清ハニケノ馬ニヤ」の歌がある。次に忠清の死罪についての説話があるが、これは長門本に近い所（三七八頁上）がある。都歸りの章では、近江源氏追討の事も長門本に類し、奈良炎上の章では、

悲哉東大寺ハ常在不滅実報寂光ノ生身ノ如来ト思食シ准ヘテ、釈尊初成道ノ儀式ヲ表シテ、天平年中ニ聖武天皇手ツカラミツカラ取立サセオハシマス。高野ノ女帝、大炊ノ廃帝、三代ノ聖主御建立有テ、婆羅門僧正、澄尊、行基僧正、鑒真菩薩、聖衆ヲ導師咒願トシテ、供養シ奉テヨリ以来、星霜四百七十余歳ニ成給フ。右転大

王ノ紫磨金ヲミカキ、毗首羯磨カ赤栴檀ヲキサミシモ、僅ニ等身ノ御仏也。況ヤ是ハ閻浮提唯一無双ノ御仏、金銅十六丈ノ盧遮那仏、烏瑟高ク顯レテ半天ノ雲ニ逆上リ……。

とある。これは、長門本卷十一の文（三八五頁上）に類する所である。この卷六は他本の卷五の記事であるが、十二卷本に比してかなりの相違のある増補である。

卷七は、他の十二卷本の卷六の巻頭より始まるので、明らかに誤りとして認むべきであるのに、卷七としたことは別の意図があつたものか。新院崩御の章では、

適残タルハ山林ニ交リテ跡ヲ留ル者一人モナシ。但形ノコトクニテモ御齋会行ナハルヘキニテ、僧名ノ沙汰有シカ共……。

とありて、花林院僧正永縁の事がない。永縁の「聞くたびにめづらしければ」の歌は時代的にあわないので、長門本にはなく、八坂流本の屋代本にもない。本書のないのもこれと関係があるう。紅葉の章では、

大膳大夫成忠其比藏人ニテ紅葉ノ奉行承テ候ヒケルカ、行幸ヨリ先ニト急キ行テ……。

とあり、屋代本と類する語がある。葵前の章では、「忍フレト色ニ出ニケリ」の歌の次に、

人シレス吾手習ハナトヤ覽恋ストヤノミ筆ノヤラレテ、

御心知ノ殿上人是ヲ給テ、アフヒノ前ニ給ケレハ、是ヲ懷ニ引入、例ナラヌ心地出キタリトテ、里ニ出テ打臥スコトナク十余日アテ、此御書ヲ顔ニ押アテ、終ニハカナク成ニケリ。

とあり、他の十二卷本は、冷泉少将隆房がとりついでとある。次に小督の章では、一方流寛一本に殆ど同文である。これは誠に特異な性格というべきである。今までの本文と異なる所である。

廻文の章では、

兼遠甲斐く、數請取テ、廿余年養育ス。人トナルマ、ニ武略ノ心タケクシテ、弓馬ノ道世ニ勝レタリ。常ハイカニモシテ、平家ヲ亡シ世ヲ執ハヤトソ申ケル。兼遠大ニ悦テ、其料ニコソ今マテ養育シ奉シカ。カク宣フコソ八幡殿ノ御末トハ覺レト申セハ、イト、心武クナル。当国ノ住人根井ノ大野太、滋野幸親ヲ始トシテ、國中ノ兵ヲ語ラウニ、背クハ一人モナシ。上野国ニモ故帶刀先生ノ好ミニ依テ、多胡郡兵共皆隨ヒ付ニケリ。

とあり、百二十句本、屋代本に類し、木曾元服の事がない。飛脚到来の章では、

菊池原田松浦党、緒方三郎惟吉以下、皆平家ヲ背テ太宰府ノ下知ニ隨ハストソ申シタル。又伊与ノ河野ヲ始トノ、南海道ニモ熊野ノ別当堪増以下、皆平家ヲ背テ源氏ニ心ヲ通ハシケリ。

とありて、一方流本にある額入道西寂の事がない。八坂流諸本と同性格というべきであろう。経嶋の章には、

円実法眼頸ニ懸、福原へ下テ収メテケリ。人ノ失ナル跡ニハ恠キ者モ朝夕ニ磬打鳴シ、例時懺法ナント云事ヲ読ハ、常ノ習ナルニ、サコソ入道ノ遺言ナランカラニ、供仏施僧ノイトナミト云事モナシ。只明テモ暮テモ軍サ合戦ノ謀リコトヨリ外ハ他事モナシ。薨シ給テ後モ、イト、罪フカクソ覺ケル。最後ノ有様コソウタテケルトモ、誠ニハ只人ニテハ無リケリト覺ルコト共多ヲカリケリ。何ヨリモ福原ノ経ノ嶋ツカセテ今ニ至ル迄上下往来ノ船ノ煩イナキソ目出キ。此嶋ハ石ノ面ニ一切経ヲ書テ策レタリシ故ニコソ、経ノ嶋トハ名付ケレ。

とある。一方流本に比して簡略である。これは屋代本と殆ど同文である。次に慈心房の章のないことも、屋代本に似る所である。祇園女御の章の次に邦綱卿の死去があり、如無僧都の事がある。但し継母の事はなく、

如無僧都三衣箱より烏帽子ヲ一ツ取出サレタリケルトカヤ。末代ニハカヤウノ事有ヘシ共覺ヘサリシニ邦綱ノ

高名有難シトソ人申ケル。

とある。これも屋代本に類する。喘涸声の章では、

猿程ニ同七月十四日改元有テ養和ト号ス。同十五日筑後守貞能肥後国ヲ給テ、鎮西ノ謀叛平ケニ西国ヘ発向ス。同八月七日將門追討ノ例トテ、官ノ庁ニテ大仁王会行ハル。

とあり、妙音院師長の院参の事なし。これも屋代本に類する所である。屋代本を示せば、

同七月十四日ニ改元有テ養和ト号ス。肥後守貞能鎮西謀叛平ケンカ為ニ既ニ其日門出ス。同八月七日將門追討ノ例トテ官庁ニテ大仁王会被行。

とある。横田河原合戦に続いて、他の十二巻本の巻七北国下向以下を述べる。従つて巻七には十二巻本の巻六と巻七の記事を含むのである。北国下向の章では、

東海道ニハ、遠江ヨリ東ハ参ラス、西ハ皆参リケリ。サレ共東国ノ案内者ニハ、長井ノ斎藤別当、俣野ノ五郎、伊東ノ九郎ナトソ候ケル。先北国ヘ討手ヲ下ヘシト、公卿僉議有テ、已ニ討手ヲ下サレケリ。

とある。傍線を附した所は一方流本にはなく、百二十句本、屋代本に類する語である。經正竹生島詣の章に、水際ヨリキツチンス金輪際ヨリ生セル所ノ嶋ナリ。然ル間洪火ニモ焚焼セラレス、慈尊ノ出世ヲ待セ給コソ久シケレ。先年都良香ト云人、彼嶋ニ参詣有テ眺望ヲ打詠メ、三千世界ハ眼ノ前ニ尽ヌトテ、次ノ句ヲ案シ給ケルニ、明神扉ヲ推開カセ給テ、十二因縁ハ心ノ中ニ空シト付サセ給ケンモ、今コソ思ヒ知ラレタレ。

とある。一方流本にはない。盛衰記巻二十八、經正竹生嶋詣の文と類する。又、

妙音弁才天、本地一体ニシテ、三名ヲ顯シ給フ。イシノ三天ケンモクノ異名是ナリ。声ヲ觀スレハ、才ヲ弁シ

給へり。只願クハ怨敵ヲ眼前ニ退ケ、凶徒ヲ掌ノ中ニ拳ラセ給ヘト、通夜祈請申サレケルソ理ナル。

とあるのは他の諸本に見ない語である。その他白蛇の現ずる事がある。これは盛衰記では白狐の出現となつてゐる。次に火燵合戦の章では、百二十句本と類する語が少しある。木曾願書の章では、一方流本は義仲勢の配置の後

に戦略を述べるが本書はその逆である。願書の次に、神功皇后、源頼義朝臣の事がない。篠原合戦の章では、

コ、ニテモ平家多ク討レケレハ、是モ又加賀ノ篠原ヘ引退ク。同廿日ノ卯尅ニ、源氏篠原ニ押寄テ、午尅マテ闘ケリ。源氏ノ方ニハ一千余騎討レヌ。平家ノ方ニハ二千余騎又討レニケリ。石階ノ合戦ノ時、兵衛佐討奉リシ俣野五郎、伊東九郎モ討死シテンケリ。終ニコ、ヲモ又落ニケリ。長井斎藤別当、武蔵三郎左衛門斗ソ引ヘテ戦ケルカ、有国ハ馬ヲ射サス。類ニハヌレハ弓杖ツイテ下立タリ。敵キ取籠テ散々ニイル。有国矢種尽テ後打物ヌイテ闘ケルカ、矢七八射立ラレテ立死ニコソ死ニケレ。

とある。八坂流甲類本に類する文である。次に実盛最後の章では、

サシモ黒カリツル鬢髪ノ白髪ニコソ成ニケレ。彼漢ノ四皓ハ首ニ雪ヲ戴テ深ク商山ノ奥ニ入り、本朝ノ実守ハ鬢ヲ墨ニ染テ長ク黄泉ノ旅ニ趣ク。彼ハ漢才ノ能潔故也。是ハ武勇ノ至テ武キ心也。昔ノ許由ハ潁川ノ水ニ耳ヲ洗テ名ヲ後代ニ流シ、今ノ実守ハ戦場ノ水ニ髪濯^{スベ}テ涙ヲ衆人ニ催シケル。

とある。許由の事のみは盛衰記卷三十にある。本書のみの文である。玄防の事ここになく後出。

飛驒守景家、上総守忠清ハ最愛ノ嫡子共討レヌト聞シカハ、出家ノ暇ヲ申間、大臣殿免レケリ。即出家シタリシカ、其思ノツモリニヤ、二人ナカラ程ナク死ニケル。是ヲ始トシテ、親ハ子ニヲクレ妻ハ夫ニ別レ、京中ニハ家々門戸ヲ閉テヲメキサケフ声々、ヲヒタ、シフハ聞ヘケル。六月八日木曾ハ越前ノ国府ニ着テ……。

木曾の山門牒状及び山門返牒は、本書と一方流本、長門本、盛衰記それぞれ若干の差違がある。本書は盛衰記に近い語がある。以上巻七を見るに八坂流甲類本に近い所もあるが、一方流本に類する章もあつて異同出入が多いが、長門本に類する所は少い。

巻八、巻頭は、玄防の章である。伊勢大神宮行幸の事は、十二巻本はすべて六月一日である。本書は六月十二日とする。長門本は六月五日、盛衰記は六月十一日である。次に平家山門への連署の章がある。願書は一方流本と少し差があり、百二十句本等と類する語がある。この願文の次に、

トソ書タリケル。親シキモ疎キモ、心アルモ心ナキモ、是ヲキク人ハ涙ヲ流シ袖ヲシホラスハ無リケリ。サレ共年来ノ振舞神慮ニモ叶ハス、人望ニモ背キシガハ、祈ル所モコタヘス、語フ人モナヒカサリケリ。是ハ六月十一日ニテアルニ、平家其日山ニテ七仏薬師ノ供養有ケリ。兵革ノ祈トソ聞ヘシ。布施ニワ三千人ニ袋米一、白布一段ツ、是ヲ引ル。法師原西坂本ニ下テ是ヲトル。奉行ハ左中弁兼光トソ聞ヘシ。法師原ハ一人シテ袋米五六七八、布モ七八タン十タンハカリモ取ケリ。トラヌハ更ニ手ヲ空フスルモ多カリケリ。トラヌ法師原腹ヲ立テ、物クハル主典代ヲ擲メ取テ、山へ上リナントシケリ。オカシカリケル事共ナリ。平家ノシトスル祈ノ一トシテ失礼ナキハナカリケリ。同十三日此曉ヨリ何ト云事ハキ、ワカネ共、世ノ中大キニ騒キアヘリ。

とある。これは他本に見えぬ語である。次に、

又何事ヤ覽ト魂ヲケス。門戸ヲ閉タル門ニモ、サ、ヤキツ、ヤキシケレ共、何事トモキ、出サス。帝都名利ノサカヒ、鶏鳴テ安キ事ナシト云リ。治レル世タニモ猶カクコソ有ケレ、マシテ乱タル時ハ理ナリ。吉野山ノ奥マテモ憂キ世ノ外ノ桜ヲモ求ムヘキニ、坂東陸奥四国九国マテモ閑ナラスト聞ユ。一天四海ノ乱レハ、深キ山

遠キ国マテモ閑ナラス、三界無安猶如火宅ト説キ給ヘルハ、如来ノ実語ナレハ、ナシカハ少シモ違フヘキ。只イカニモシテ今度生死ノ流転ヲ離レテ、極楽浄土ヘ往生セントソ心アル人ハ申ケル。抑此曉ノヒソメキヲハ人キ、直シタリ。其故ハ前筑後守重貞ト云源氏、近江国八嶋ノ所領ニ有ケルカ、北国源氏近江国ニ打入テ……とあり、長門本卷十四（四七九頁上）に類する文である。貞能の上落も長門本に類する所がある。次に維盛の北方との別離を述べる。これは長門本の文（四八〇頁上下）と殆ど同文である。長門本所収の和歌二首はない。以後は一方流本と記事の順序が異なるので細かい考察が必要である。目録によって示せば、

木曾義仲登山事（延慶本に近し）

大臣殿被参女院御所事（一方流本に近し）

法皇潜落給事（同右）

平家零落事付行幸（同右）

経正仁和寺宫参事（長門本と類する所あり）

維盛北方暇乞事

畠山兄弟暇給事

維盛以下行幸奉追付事

池大納言落留事

摂政殿落留給事

貞能帰入京都事

再び平家物語南都本について

忠度帰都俊成卿対面事付行盛歌事

法皇鞍馬御幸事

惠美大臣事

行家義仲入洛事

法皇自山還御事

行家義仲院御所参事

平家福原着給事

能方福原下経盛笛曲伝事

平家宇佐宮参籠事

とある。法皇鞍馬御幸事以後は十二卷の諸本すべて卷八に入る。従つて本書は、十二卷本の卷七・卷八の両卷にわたる伝本である。摂政殿落留給事は、

又其時ノ摂政殿ト申スハ、普賢寺ノ内大臣基通公ノ御事、平家ノ聲ニテ御座ケレハ、名残ヲシタヒ給テ共ニ都ヲ落給フ。摂政殿年比御身ヲハナタレヌ侍ニ、進藤左衛門尉高則ト云者アリ。折節嵯峨ナル所ニ居タリケルカ、此事ヲ聞テ申ケルハ、ヨモサル事ハアラシ、サ程ノ御事ヲ高則ニ触仰ラレサルヘシトハ覺ヘヌ物ヲトテ、急キ参テ見進セケレハ、ケニモ殿モ渡セ給ハス、御所サエ焼ニケリ。アナ心ウヤ、コハイカナル事ニカト思テ、装束ヲナヲスニ及ハス、馬ニ鞭ヲアケテ鳥羽ノ焔ノ山ノ辺ニテ追付進セ、馬ヨク飛下テ、御車ノナカエニ取付テ申ケルハ、是程ノ御大事ヲハイカニ高則ニハ仰ラレ候ハサリケルソヤ、口惜候物カナ。平家ハ悪行年積

テ、神明神道ノ罰ヲ蒙テ、一門親類洛中ニ跡ヲ留メス、何クヲ指トモナク落失候ヌル上ハ、行末トテモ何程ノ事カ候ヘキ。サレハ西国ヘ落サセ給タラハイク程ノ御助カリカ渡ラセ給フヘキ。疾々御歸リ候ヘシトソ申ケル。其詞未タオワラサルニ何クヨリカ出来タリケン、天童二人御車ノナカエニ取付テ、都ノ方ヘ引向ケタリケレハ、牛モ究竟ノ逸物ナリケレハ、作道ヲ上リニタキリテ御車ヲ引、其勢僅ニ五十余騎幡卷上テ還御成ニケリ……。

とある。他の諸本に見えない語である。忠度帰都俊成卿対面事には、「サ、波ヤ志賀ノ都ハ荒ニシヲ」の歌の次に、宮原の女房の局で扇を使い止めた事がある。これは他の十二巻本では、巻五、忠度の東国下向の時に述べる説話である。又続いて行盛の歌の事がある。これは長門本巻十四（四九六頁上下）の文と殆ど同文で、長門本による増補である。次に法皇鞍馬御幸事がある。他本の巻八の巻頭の章である。この章の後半に、他本の福原落の一節を述べ、続いて、恵美大臣事がある。これは、

昔藤原仲丸ト云人アリケリ。贈太政大臣武智丸ノ子ナリ。高野ノ女帝ノ寵臣ニテ……。

に始まり、「何ホトカハアランスル。只今亡ヒナンスル物ヲトソ時ノ人ハ申シケル」に終る。この章は殆ど長門本巻十四の文と同文である。長門本によつて補入せられたと認められる。又続いて、

明ル廿六日法皇ハ山ニ渡ラセ給フト聞ヘケレハ、我サキニト馳セ参リ給フ……。

も長門本に近い文である。次の行家義仲入洛事、法皇自山還御事、行家義仲院御所参事は長門本と異なる。従つて中間に長門本によつて補入したと推定せられるのである。次に、

又前ノ兵衛佐頼朝ヲ召ニ御使ヲ関東ヘ遣ハサル。御使ハ庁官トソ聞ヘシ。源氏イツシカ朝恩ニホコリテ世ヲト

ルアリサマヲ見テ、或人読タリケルトカヤ、

カシワ木ノ森ノ梢ソサカフナル葉モリノ神ノ恵ミナルヘシ

とある。これは他本になし。続いて、

主上ハ外家ノ惡徒ニヒカレテ……新主ヲ立奉ルヘキ由、院ノ殿上ニテ公卿僉議有ケリ。

も長門本と同文である。次に平家福原落がある。この章は記事の順序が長門本とも異り、記事の内に盛衰記による、と認むべきものがある。例えば、

中ニモ薩摩守忠度ハ眺望ナリケル御所ノ草花ヲ一枝手折テ聖靈ニ回向シテ涙ヲ流シツ、

ナキ人ニ手向ル花ノ下枝ヲタオレハ袖ノシホレケル哉

ト詠メテ、イツカヘルヘントモ覚ヘネハ、スソロニ涙ヲ流サレケリ。

とあり、又経盛の管絃講の記事がある。これは盛衰記によるもので他本にはない所である。最後には、一方流本巻八、太宰府落の文、即ち、

磯部ノ躑躅ノ紅ヒハ袖ノ露ヨクサクカト疑ハレ、五月雨ノ苔ノシツクハ故郷ノ軒ノ忍フニアヤマタル……懷土望郷ノ涙押ヘカタシ

がある。そして巻八末に、宇佐行幸がある。これは福原より直に宇佐行幸となるためにやや接続に不備の感を与える。この巻八は、長門本、盛衰記による増補があり、十二巻本と甚しい差異がある巻といふべきである。

巻九、巻頭、八月五日春宮定事、即ち十二巻本の巻八、山門御幸の章の半ばより始まる。

寿永二年八月五日法皇ハ高倉院ノ御子先帝外三所御座ケルヲ、二宮ヲハ儲ノ君ニシ奉覽トテ平家取奉テ……。

とある。以下、長門本卷十五の巻頭以下の文と、同文である。同六日平家一類解官事も長門本と同文。次いで十六日於院殿上除目被行事も長門本に近いが、次に、

其比イカナル人カヨミタリケン、

昨日マテカ、ラサリシヲアスカ河イカニ淵瀬ニ替り行覽

ト読タリケレハ、アル人ノ返シケル、

淵瀬トハアナカチイヒソサ、レ石ノ岩尾トナラン御代ニヤハアラヌ

とあるのは他本に見ない語である。十七日平家付筑前国事に平家の安樂寺参詣がある。長門本と異なる。重衡の歌は、「住ナレシ都ヲ忍フ心ヲハ神モ昔ヲオモヒシルラン」とあり、十二卷本は、「故き宮この恋しさは」とある。

盛衰記卷三十二には経正の歌として、「住なれしふるの都の恋しさに神も昔をわすれ給はじ」とある。次に廿四日四宮踐祚事があり、惟喬惟仁親王の位あらそいは十二卷本に近く、九州二嶋皆平家事（四六九—四七〇頁）は、長門本と殆ど同文である。然し次の平家鎮西内没落事は、長門本と異なる文である。以上十二卷本では、宇佐行幸、緒環、太宰府落の三章にあたる所である。頼朝可為征夷將軍御使事（征夷將軍院宣）は長門本とやや異なる所がある。次に平家自九国渡四国事がある。平家は柳浦に着き、忠度が、「都ナル九重ノ内恋シクハ柳ノ園ヲハルヨリテ見ヨ」と詠む。長門本は、「柳の御所を」とある。盛衰記は、「柳の御所を立ちよりて見よ」とある。次に清経北方の事がある。

小松殿ノ三男清経ノ中將ノ北方ハ、五条大納言邦綱ノ御娘ニテソ御座ケル。御歳十八歳ニソ成給フ。平家都ヲ落給シ時、人々ハ皆妻子ヲ伴ヒ給ヒシカ共、此清経ハ具給ハス。北方ハ都ニ止テ忍ヒツ、住給ケルカ、余ニ恋

悲ミ給テ、ハカ／＼シク湯水ヲタニモ喉へ入給ハス、何トナク悩煩ヒ給テ、打臥シカチニソ御座ケル。中將都ヲ出給ヒシ時、鬢ノ髪ヲ少切テ、浪路遠ニ別行ケハ、露ノ命消スシテ再ヒ相見奉ラン事モ難シ。ナカラン後ノ忘形見ニモ御覽セヨトテ、止メ置給タリケルヲ、北方常ハ取出シテ、貞ニオサヘ胸ニアテ泣カナシミ給ケルカ、中々見給ヘハ思フマス便リトナルモ由ナケレハ、心ツクシノ風ノツテニ返サハヤナント宣ヒケルカ、カクソ詠給ケル、

見ル度ニコ、ロツクシノ髪ナレハウサニソ返ス本ノヤシロヘ

カクテ其後イク程ナクテ終ニ思死ニソ失給フ。カク罪深ク思給シ事ナレハトテ、御乳母ノ女房歎ノ余ニ、此御歌ニ中將ノ黒髪ヲ引具シテ、ハル／＼鎮西へ進セタリケレハ、中將是ヲ見給テ……。

とある。これは長門本及び一方流本になく、八坂流丁類本にあり、恐らく盛衰記卷三十三の記事がその基となったものであらう。次に平家は四国へ渡るが、ここに九月十三夜の平家の人々の和歌がある。これは長門本と殆ど同文である。(長門本五一七頁下)。又次の三種神器返納御使事も、長門本と同文(五二〇頁上下)である。木曾振舞事は、猫間の章で、長門本と異なる所がある。以下十一月備中国水嶋合戦事、木曾与瀬尾合戦事、幡磨国室山行家与平家合戦事は長門本と異なる所があるが、次の十九日法住寺殿合戦事以下は、一部長門本と同文の所がある。刊本でいえば、五二〇頁2より五二二頁7に至る文、五三八頁4—9の語、五四五頁7より五四六頁5に至る文、五四九頁3より五五〇頁4に至る文など、その好例である。かくてこの巻九は長門本の影響の多い巻である。最後に近い一節を示せば、

其比イカナルアトナシ者ノシワサニカ、法皇ノ押籠ラレサセ給ヘル五条内裏ノ門ノ脇ニ札ニ書テソ立タリケ

ル、

赤サイテ白タナコイニ取カヘテ頭ニマケル小入道カナ

赤サイテトイヘルハ、平家ノ赤旗ノ事ナリ。白タナコイトハ源氏ノ白旗ノ事ナリ。小入道トカケルハ、忝モ法皇ノ御事ヲ申タルヘシ。法皇是ヲ御覽セラレテ実ニ我頭ニマケリ。但随分大入道トコソ思フニ、小入道ト云レタルニソ本意ナケレト仰ラレテ咲ハセ給ケルトカヤ（五四五頁）。

とあるのは長門本に類するがその位置は長門本と異なる所がある。

卷十、卷頭は、木曾義仲参院御所可追討平氏之由申之事に始まる。これは十二卷本の卷九の卷頭、小朝拝の章である。次に東国兵士上洛事があり、東国より上洛の範頼義経に随う軍勢の交名がある。長門本、盛衰記などの影響があろう。高綱景季宇治河渡事（宇治川の章）は、高綱と景季の宇治河渡りが簡略であつて他の諸本と著しく異なる。

ネツタイ誰モヌスムヘカツシ物ヲト云テ、互ニ咲テ打連レテソ上リケル。サル程ニ宇治勢多ノ日記鎌倉へ参リタリ。先ツ日記ヲハ御覽セスシテ、御使ニ高綱ハ有ルカト御尋アリケレハ、候ト申ス。サテハ先シテケリト思食サレテ、日記ヲヒラキ御覽スレハ、今度宇治河ノ先陣、近江国住人佐々木四郎高綱ト一ノ筆ニ付タリケル。

とある。義仲被討事（木曾最後）に、海老名小五郎能定が義仲に射殺される事（五九四頁4―五九五頁6）がある。他本なし。次の樋口次郎兼光被切事に、

同二十七日義仲郎等兼光兼平カ頸ヲ渡サル。九郎義経六条河原へ打出テ、檢非違使ノ手ニ渡ス。檢非違使是ヲ請取テ、東洞院ノ大路ヲ渡ヒテ東ノ獄門ノ木ニカク。法皇モ御車ヲ六条東洞院ニ立ラレテエキ覽アリ。不思議ナリシ事共ナリ。平家ハ讃岐国八嶋ニ御座ケルカ……。

とある。平家帰住福原事（六箇度合戦）の中に（六〇七頁）維盛の歎きがある。十二卷本なし。平家楯籠一谷事に、一谷に楯籠る平家の軍勢の名がある（六一六頁2—六一七頁終）。これは盛衰記卷三十六の文によったものであるうか。源氏調討手事の範頼義経に随う軍勢の交名は、他本と異なる所がある。義経夜討三草山事に、田代冠者の事があり、これは長門本の文に近い所である。一谷以下城没落事の中、越中前司盛俊最後の処に、猪股金平六則綱と人見四郎との盛俊の首争いの事がある（六七五頁）。他本なし。又武蔵三郎左衛門有国討死の事（六七六頁8—六七七頁7）もある。他本なし。又越前三位通盛最後（六七八頁）も他本なし。新中納言知盛の宗盛の御前での歎きの次に、

或ハ利劔ヲ踏テ地ニ倒レ、或ハ流矢ニ当テ命ヲ失フ類、麻ヲチラセルカ如シ。水ニオホレ山ニ隠レシ輩ヲ幾千萬カ有ケン。主上女院、内大臣平大納言、此人々ノ北方、御船ニテ目ノアタリ是ヲ御覽セラル、御心ノ中イカハカリカハ有ケント推ハカラレテ哀ナリ。翠帳紅圍万事ノ礼法コトナルノミニ非ス、船ノ中浪ノ上、一生ノ愁悲タトエン方モオハシマサシ物ヲト哀也。父ハ船ニ有テ子ハ磯ニタウレ、妻ハ舟ニ有テ夫ハ渚ニフス。主ヲ捨友ヲ捨テモ片時ノ命ヲ惜ミキ。兄ヲ忘レ弟ヲ忘テモ暫ク身ヲタハフ。小池ノ魚ノ泡ニイキツクカ如シ。龍頭象角ヲ恐ル、ニ似タリ（六九九頁7—六七〇頁7）

とある。これは、長門本卷十六の文である（五九六頁上）。卷の最後、小宰相局入水事に、

夫ニオクル、タクヒートシナ、ラス有ケレ共、忽ニ身ヲナケ命ヲ失フタメシハ有カタクコソアリケメト、キク人袖ヲソシホリケル。一年セ保元ノ合戦ノ時六条判官為義カ女房、夫婦偕老ノ空キ契リヲ悲ミ、母子恩愛ノ深キ歎ニシツンテ、セン方ナサノ余リニヤ身ヲナケタリシヲコソ、不思議ト思ヘリシニ、又カ、ルタメシノイテ

キタルモ哀ナリ。賢臣ハ二君ニ仕ヘス、貞女ハ両夫ニ嫁カスト云本文アリ。彼文ニ少モタカハストソ時ノ人ハ申ケル。門脇ノ中納言ハ……心ヨク思給ヒケリ。権亮三位中将ハ是ヲ見給テ、賢フモオサナキ者共ヲ都ニ留置テケル物カナ。イカニモマノアタリカクウキ事共モ見マシカハ、只カウコソアラメトテ、涙ヲナカシ給ケリ。哀ナリシ事共ナリ。

とある。前の傍線を付した所は本書の増補であり、後の傍線を付した所は長門本盛衰記の影響である。この巻は他の巻々よりは本書の独自の文と認められる性質が顕著である。但し内容上は十二巻本と差の少いことはいうまでもない。唯敦盛最後のないことは、注目すべきことである。

巻十一、巻頭は、平家一族頭上落事で、他の諸本の巻十の巻頭である。維盛の歎きの条に、

少キ人々目ヲ見合セ、世ニ／＼恋シクコソ思參セ候ヘナトハカナケニソ書レタル。余三兵衛御返事給テ、八嶋ヘ帰り参タリ。三位中将此文ヲ開テ見給ニ、北方兎角ウラミクトキ書レタルヨリモ、少ヒ人々ノイトケナキ筆ノスサミニ、恋シクト書タリケルヲ見給ニソ、イト、セン方無クハ思ハレケル。故郷ノイフセカリツル事共皆キ、分給ヌレ共、恋慕ノ思ハ猶ヤマス、妻子ハモトヨリ心ヲツナク物ナレハ、穢土ヲ厭ニ障ト成リ、闇浮愛執ノキツナツヨクシテ、浄土ヲ願ニ物憂シ。今生ニテハカクイットナク妻子ニ心ヲクタクノミナラス、当来ハ又修羅ノ苦ミニコソ沈マンスレ。シカシ是ヨリ浦ツタイニモ都ニ上リ、恋シキ人々ヲモ見モシ見ヘモシテ、妄念ヲ払、其後ヤカテ出家入道シ、火ノ中水ノ底ニモ入ナンニワトソ思定給ヒケル。

とある。傍線を付した如く百二十句本に近い所がある。内裏女房の条では、木工右馬允政時とあり、八坂流本の名である。その最後は、

アフ事モ限トキケハ露ノ身ノ君ヨリサキニ消ヌヘキ哉

三位中将是ヲ見給ニ付テモ、日比ノ志ノワリナキ程モ顯レテ、絶ヘヌ思ノ余ニハ、声モ出テ泣ヌヘクコソ思ワレケレ。其後コノ女房内裏ヲ忍出テ、年廿三ト申ニ、花ノ姿ヲ引違テ、墨染ノ袖ニヤツレハテ、東山双林寺ノ辺ニ行ヒスマシテヲハシケル。我身ノ後世ヲモ欣ヒ、三位中将ノ後世ヲモ訪給ヒケルトカヤ。此女房ト申ハ、大原民部卿入道親範卿ノ御娘ナリ。左衛門佐殿トソ申ケル。

とある。他本に比して詳細である。請文は他本と少しく異なる所がある。本三位中将東国下向事の中、戒文の条は、黒谷法然上人とあり、その文は一方流本に類するといえよう。例えば、

上人是ヲ取テ懷ニ入、兎角ノ返事ヲモ宣ハテ、墨染ノ袖ヲ白押当泣々帰給ヒケリ。件ノ硯ハ親父入道相国砂金ヲ多ク宋朝ノ御門ヘ参ラレケレハ、返報ト覺シクテ、日本和田ノ平大將軍ノ許ヘトテ渡サレケルトカヤ、名ヲハ松影トソ申ケル。

とある。次に海道下では、一方流本と少しく異なる語がある。

野路ノ篠原ノ露ヲ分ケ、真野ノ入江ノ浜風ニ、志賀ノ浦浪春カケテ、霞ニ曇ル鏡山、夕日モ西ニカタフケハ、麓ノ宿ニソ付給フ。……磨針山ヲ打越テ、心トムトモ無レトモ、……板ヒサン、

ミノナラハ花モサキナンクキセ川渡リテ見ハヤ春ノケシキヲ

ト打詠メ、尾張ナル熱田ノ社ヲ臥シヲカミ、何トナルミノ塩干潟……。

とある。千手は長門本とは大いに異り一方流本に近く、又維盛高野参詣并宗論事の横笛の条に、

障子ノ隙ヨリ見ケレハ、ネクタレカミノ絶間ヨリ涙ノ露モ所セキ緑ノマヌミ乱レツ、今夜モ打トケ寝サリ

ケリト覺クテ、面ヤセタル氣色、尋カネタル在様、誠ニイタハシクテ……。

とあり、傍線を付した如く、八坂流本の語がある。宗論は、長門本、百二十句本にもあるが、本書は、岩波古典大系本所収の宗論と同文と認められる。最も古き宗論ではなからうか。又維盛出家の条に、

殊ニ御哀ミ候テ、九ノ年君ノ御元服ノ候シニ、忝モ髮取上ラレ参セテ、盛ノ字ヲハ五代ニ付ヌ、又重ノ字ヲハ松王ニ給トテ、サテコソ重景トハ召レ候シカ。又童名ヲ松王ト申事モ生レテ五十日ト申ニ、父カイタキテ参テ候ケレハ、此家ハ小松ト云ヘハ、祝テ松王ト付ントテ、故殿ノ付サセヲハシマシテ候ケルナリ。サレハ御往生ノ時、コノ世ノ事ヲハ皆思食シ捨サセ給テ、一事モ仰出サレ候ハサリシカ共、重景ハ少將殿ノ御カタミニ候テ、宮仕ツカマツレ、相構テ御心ニタカウナト、最後ノ仰ニモ候テ、取分此御方ニテ既ニ十七年一日片時モ離参セス、ウエシタナウ遊ヒタワフレ参セ候キ。

とあり、一方流本とも異なる行文である。維盛入水の条に、

今日ヲ限りノ名残ナレハ、春ノ名残モサコソハ惜カリケメ。或ハ龍顔ニ咫尺シテ、春ノ花ニ歌ヲ詠シ、或ハ宮院ニ夙夜シテ、秋ノ月ニ管絃ヲ奏シ、或ハ門司赤間ノ浪ノ上ニウキネシテ、唐櫓ノ音ニ夢ヲサマシ、或ハ八嶋ノ浦ノ海士ノ苦屋ニ旅ネシテ、波間ノ月ニ心ヲクタキ、過ニシ方ノ榮衰ハ、皆夢トソ成ニケル。雁ノ雲井ニ音信レ行ヲ見給ニ付テモ……。

とある。他本にない語である。次に、崇徳院遷宮、池大納言頼盛関東下向、維盛北方沙汰、新帝即位、八嶋有様、範頼発向があり、佐々木三郎藤戸渡事と続く。この章の中に、

源氏郎等上野国住人和見八郎行重、平家ノ船ニ乗移リ、讃岐国住人加部源次ニムストクム。和見八郎ヲ取テ押

へ頸カキ切テヲキアカラントシケルヲ、和見カイトコニ小林三郎高重落合テ、賀部ノ源次ニムスト組テ驢テ海へソ入ニケル。小林カ郎等ニ黒田源次熊手ヲ落シテサカシケレハ、主モ敵モ共ニ取付テソアカリタル。賀部源次ヲハ舫ニトリオサへ頸カキ切テ捨ニケリ。主ヲ引上テ助タリ。是ヲ始トシテ大勢打入テソ渡シケル。

とある。長門本卷十七、盛衰記卷四十一にもあり、八坂流本には収めるが、一方流本はない。大嘗会沙汰があつて次に、

九郎判官院参奏聞事

判官梶原逆櫓諍事

と続く。義経に随う軍勢の交名は盛衰記卷四十一の文に近い。他の諸本になし。以下は特に顯著な異同はないが一方流本に比して少しく異なる語が多い。この巻は能登殿最後振舞事で終る。

卷十二、巻頭に目録がなく、本文も書き続けである。その巻頭は、

元暦二年ノ春ノ暮、何ナル年月ニテ一人海底ニ沈ミ百官波ノ上ニ浮ラン……。

で始まる。九郎義経院へ奏聞、生捕男女明石到着を述べる。ここに、

判官モレ聞テ、武ナレ共情フカク心有ル人ナレハ、身ニシミテ哀ニソ思ハレケル。其ヨリ須磨ニ着給ヒテ、コ、ニモ一夜ヲ明サレケリ。彼須磨ニハイト、心尽シノ秋風、海ハスコシ遠ケレ共、行平中納言ノ関吹越ルト云ケン浦波、折近ク音信レテ、又無ク哀ナル物ハカ、ル所ノ旅ナリケリ。枕ヲ歛テ四方ノ嵐ヲ聞給ヘハ、波タ、コ、モトニ立クル心地シテ、泪落トモヲホヘヌニ、枕ハ浮ヌハカリナリト書タリシ紫式部カ筆ノ跡、今コソ思ヒ知レタレ。同廿五日内侍所并ニ神璽ノ御箱鳥羽ニ着セ給ヨシ聞ヘケレハ……。

とある。これは源氏物語の補入である。

次に劍卷がある。八坂流甲類本の劍卷に類する。屋代本の劍卷よりも岩波古典大系所収の劍卷に近い本文を有する。本書の独自なる所としては、「八幡大菩薩ハ百王鎮護ノ御誓」とか、「去程ニ其比法皇ノ御夢想ニ御覽セラレケル事コソ不思議ナレ。昔素盞尊ニ出雲国ニテ切殺サレ奉リテ失ニシ大蛇、八ノ頭ハノ尾ヲ表事トシテ……」が目せられる。平家生捕共被渡大路事の次に鏡卷がある。これも岩波古典大系所収の鏡卷に近い。

寛治ノ比ヒ、内侍所ノ御神楽有シニ、主上御簾ノ内ニテ拍子ヲ順ヒ給ヒツ、忠賢ヲ召テ授サセヲハシマス。

父ニ習ハンハ世ノツネナリ。賤キ身無シ子ニテ、カ、ル面目ヲ施ケルコソ有難ケレ。道ヲ失ハシト思召ス御志感涙押ヘ難シ。

とある。傍線を付した所は一方流本に異なる。盛衰記と類する語である。平大納言文沙汰の次に、建礼門院吉田入御同御出家がある。一方流寛一本の灌頂卷の文と殆ど同一であるが、少し異なる所がある。

朽坊ニ入セ給ケン御心ノウチ押量ラレテ哀ナリ。道スカラ僅ニ付参セタリシ女房達モ、是ヨリ皆チリ／＼ニ成給ヌ。御心細サニイト、消入様ニソ思召レケル。魚ノ陸ニ上ルカ如シ。……東山一亭ノ月ニ落ツ。同底ノミクツトモ成ヌヘカリシ身ノ、責テノ罪ノ酬ニヤ残リト、マリテト思召ケレ共、甲斐ソ無キ。天上ノ五衰ノ悲ミ人間ニモ有ケル者ヲトソ見ヘシ。同五月一日女院御クシヲロサセ給ケリ。

とある。傍線を付したイは、鎌倉本にはなく、百二十句本は、「女はうたちもこれよりちり／＼になり」とあり、屋代本には、「道ノ程僅ニ付奉リ給シ女房達モ是ヨリ散々ニ成ヌ」とある。ロは百二十句本になく、鎌倉本屋代本にある語である。従って八坂流甲類本の本文というべきであろう。大臣殿父子関東下向事（腰越）に、

古ハ名ヲノミ聞シ海道ノ宿々名所々々ヲ打過キ々々下給フ。駿河国浮嶋カ原ヲ過給フトテ、大臣殿、

塩路ヨリタヘヌ思ヲ駿河ナル名ハ浮嶋ニ身ハフシノネニ

右衛門督、

我ナレヤ思ニモユル富士ノネノ空キ虚ノ煙ハカリハ

原ニハ塩屋ノ煙片々タリ。風ニナヒキテ行ヘモ知ラス立マヨヘリ。伊豆ノ国府ニ付給テ、三島大明神ト聞給ヘハ、昔能因カ苗代水ト読タリシ言ノ道ニ納受シテ、エンカンノ天ヨリ雨クタリ枯タルイナハモ忽ニ緑ノ色ニ成タリシ目出キ神ニテマシマセハ、来世ニハ必助ケサセ給ヘト、伏ヲカミ箱根ヲ越テ日数フレハ、廿四日鎌倉ヘ下リ付給フ。

とある。傍線を付した所は、鎌倉本、百二十句本、屋代本にはなく、「原ニハ塩屋ノ煙片々タリ」は、盛衰記卷四十五の内大臣関東下向の章の語である。又三島大明神の事は、長門本、盛衰記にあり、その影響をみるべきであろう。腰越状も、覚一本と少し異なる所がある。

朝敵をカタムケ果代弓箭ノ芸ヲ顯シ、会稽ノ恥辱ヲ雪メ、忠賞ヲ行ハルヘキ処ニ、思外ニ虎口ノ讒言ニ依テ、莫大ノ軍功ヲ默止セラル。義経犯事無シテ咎ヲ蒙ル。功有テ誤無シト云ヘ共、御勘気ヲ蒙ル由、空ク紅涙ヲ流ス。情事ヲ案ニ、讒者ノ実否ヲ……。

とある。右の傍線を付した所は覚一本になく、長門本によったものであろうか。鎌倉本はこれに類する。流布本もこれに類するのは後の改訂である。大臣殿父子被誅事に、

先世ノ御宿業ナリ。代ヲモ人ヲモ恨ミ思召ヘカラス。此世ハ生者必滅ノ国ナレハ、生ル、者ハ必ス死ス。会者

定離ノタメシ有リ。遇フ者ハ定テ別ル習有リ。釈尊イマタ栴檀ノ煙ヲマヌカレ給ハス。況ヤ闇浮不定ノ境樂ミ
尽テ悲來ル。天人猶五衰ノ日ニ遇ヘリトコソ申候ヘ。誰カナメシ不老不死ノ藥ヲ。誰カタモチタリシ東父西母
カ命、切利天ノ億千歳……。

とある。傍線を付した所は、覺一本になく、鎌倉本、百二十句本、屋代本に類する所である。従つて八坂流甲類本
と關係が深く、不老不死の藥の事は八坂流諸本に無く、本書の増補であらうか。その最後に、

聖此ハカニ率都婆ヲ立ラレタリケレハ、何ナル人カ説タリケン、

思キヤ花ノ都ヲ散シヨリシカノ浦風吹タツラントハ

フリニケル大津ノ宮ハアレハテ、其名ハカリノ後ノ篠原

ト二首ノ歌ヲソ書付タル

とある。「思キヤ」の歌は六代勝事記の歌である。重衡卿被渡南都被誅事（重衡被斬）も、覺一本と少しく異なる語
がある。これらは百二十句本に類する所がある。大地震事の次に、建礼門院の大地震にあらう事がある。一方流本の
灌頂卷の語である。覺一本に同じ。次に義朝首鎌倉下事（紺搔沙汰）、平家生捕共遠流事（平大納言被流）がある。

大略覺一本と殆ど同文であるが、少しく異なる所があり、これらは八坂流甲類本に類する。次に建礼門院大原寂光院
入御事がある。これ又覺一本の灌頂卷の語と殆ど同文である。次に土佐房昌俊上洛事がある。この章は覺一本と大
いに異なる所がある。最初に、

去程ニ源二位殿、頼朝カ敵ニナルヘキ物ハ今ハ不覺、奥ノ秀衡ソアルトノ給ヘハ、梶原、判官殿モヲソロシキ
人ニテ御渡候モノヲ、御心ユルシ候マシト申ケレハ、源二位殿、頼朝モ内々ハサ思フメリトソノ給ケル。是ハ

再び平家物語南都本について

此者渡辺ニテ船ニサカロヲ立ンタテシト云事、堀原ト相論シタリシニヨテ、景時判官ヲニクミタテマツリ終ニ
讒言シ失ヒ奉リケルトカヤ。鎌倉殿討手ヲ上セラレケル。三百余騎ノ勢ヲソロヘテ、第三河殿ヲ呼奉リ、御辺
都へ上テ九郎討給ヘト被仰ケレハ、畏テ承候ヌトテ……。

とあり、三河守誅殺を述べる。覚一本は昌俊誅亡の後に述べる所である。九郎判官都落事も覚一本と異なる文であ
る。次に北条時政上洛事、吉田大納言経房卿事、行家義範被誅事がある。覚一本と少しく異なる。志田三郎先生義範
の事は覚一本に比して極めて簡略である。次に六代御前被捕事がある。覚一本と甚しく異なる所は、文覚頼朝対面の
条（九九八頁）に、文覚カ義朝と鎌田兵衛正清との首を持参した由を告げる事がある。これは前の義朝首持参の事
（紺搔沙汰）と重複する感がある。次に法皇大原御幸事がある。

岸ノ青柳露ヲ含ミテ玉ヲツラヌク歟ト疑ヘレ、池ノ浮草浪ニタ、ヨヒテ……藤波、木末ノ花ノ残レルモ、山郭
公ノ一声モ、今日ノ御幸ヲ待カホ也。サラテタニ深山カクレノ習ナレハ、ヲホハラヤ森ノ下草シケク、青葉交
リノ遅桜、初花ヨリモメツラシク、水ノ面ニ散敷テヨセクル浪モ白妙ナリ。

鎌倉本は覚一本の灌頂巻の大原御幸と同文であるが、百二十句本は、

きしのやなぎつゆをふくみ、たまをつらぬくかとうたがひ、いけのうきぐさなみにたゞよふて、にしきをさら
すかとあやまたる。まつにかゝれるふちなみの、木ずゑの花ののこれも、山ほとゝぎすのこゑも、けふの
みゆきをまちがほなり。み山がくれのならひなれば、あをばにまじるをそざくら、はつはなよりもめづらし
く、みづのおもにちりしきて、よせくるなみもしろたへなり。（京都総合資料館蔵本）

とあって、八坂流甲類本の文である。庵室の有様にも、

御前ノ机ニハ、淨土ノ三部經、八軸ノ妙文、九帖ノ御疏ナトモ置レタリ。觀經アソハシカケタルトラホシクテ、半卷ハカリソマカレタル。障子ニハ諸經ノ要文トモヲ色紙ニ書テヲサレタリ。若有重業障、無生淨土因、乘阿弥陀願力、必生安樂國ナトモアリ。參河ノ聖カ、清涼山ノ麓ニテ作タリシ笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前ト云ヘル詩モアリ。又傍ニハ一生如夢、誰期百年之榮ヲ、万事ハ皆空シ、爭成常住之思、身ハ是時雨ニ染ル紅葉葉、命ハ草葉ニムスヘル露、無常ノ風一タヒサソヘハ、有待身四方ニチルナトモアソハサレタリ。ソハナル障子ヲ引アケ給タレハ、御寢所ト覺シクテ、竹ノ御棹ニ懸ラレタル物ハ麻ノ御衣ニ紙ノ衾、昔ノ蘭麝ノ匂ヲ引替テ、ソラタキ物ニカホルハ、不斷ノ香ノ煙也。彼淨名居士ノ方丈ノ室ニ三万二千ノ床ヲ並ヘ、諸仏ヲ請シ奉ラレケンモ、是ニハ過シトソ見ヘシ。中ニモ後徳大寺左大臣実定公、

イニシヘハ月ニタトヘシ君ナレトソノ光ナキ深山辺ノ里

ト泣々詠セラレタリケルニソ、皆人袖ヲヌラサレケル。其後上ノ山ヨリコキ墨染ノ衣着タル尼二人木ノ根ヲツタフテヲリ下ル。

とある。灌頂卷の文に増補せられた語があり、実定の歌は灌頂卷では女院御往生の条に載せる歌である。六道沙汰も一方流本に比してやや簡である。女院御往生の条は、

イサ、ラハ涙クラヘン時鳥我モ浮世ニ音ヲノミソ鳴

其後ハ法皇ヨリモツネハ訪ヒマイラセサセ給ヒケルトソ承ル。女院ハ弥陀念仏ヲコタラセ給ハス、遂ニ龍女カ正覺ノ跡ヲ追ヒ、韋提希夫人ノ往生ヲトモナワセ給イケリトソ承ル。哀ナリシ御事也。

とある。一方流の灌頂卷に比して極めて簡略である。次に六代御前出家事、伊賀大夫知忠事、丹波侍従忠房出降人

被誅事、土佐守宗実事、文学隠岐国流罪事、六代御前被斬事があるが、覚一本の順序は、丹後侍従忠房、土佐守宗実、伊賀大夫知忠、越中次郎兵衛盛嗣、文覚流罪、六代被斬の順であり、本書と異なる。本書は以上の記事は覚一本に比して極めて簡略である。例えば、

越中次郎兵衛ハ但馬国住人氣比ノ權守ノ手ニ懸テ遂ニ被討ニケリ。悪七兵衛ハ其年ノ冬鎌倉ニテ被生捕テ、宇都宮ニ被預ケリ。其比主上ト申ハ後鳥羽院ニテソ御座ケル。

とある。

以上の考察によりて南都本は、全般としては八坂流甲類本を基として、一方流本、長門本、盛衰記を参照して改訂増補をした伝本といふべきである。

最後に南都本の特質として武将達の装束について若干述べよう。平家物語の武将の装束は覚一本の記述が基で、語りつぐ間に次第に変化して行つたと認められるが、南都本は特に注目すべき語が多い。卷一の額打論に、

観音房ハ黒糸威ノ腹巻ニ白柄ノ長刀ノ鞘ヲハツシ、勢至房ハ附子縄目ノ腹巻ニ、黒漆ノ太刀ヌキ二人ツト走出テ（六二頁）

とある。覚一本には、

観音房は黒糸威の腹巻にしら柄の長刀くきみじかにとり、勢至房は萌黄威の腹巻に、黒漆の太刀もて、二人つと走出

とある。八坂流本には、ふしなはめの腹巻とある。御輿振の章に、

西塔撰津堅者豪雲トテ、三塔一ノ云口、一山ノ張本トオホシキ大衆、萌黄ノ糸威ノ腹巻ヲ衣ノ下キタルカ、

とある。覺一本には装束を記さない。座主流罪の章に、

有慶トテ三塔ニキコヘタル大惡僧アリ。黒皮威ノ胄ノ大荒メナルニ、三枚甲ノ緒ヲシメテ、三尺ノ長刀ノチノ
ハノ如クナルヲ杖ニツキ、

とある。覺一本は、

黒皮威の鎧の大荒目にかねまぜたるを草摺長にきなして甲をばぬぎ法師原にもたせつつ、白柄の大長刀杖につ
き

とある。卷五、富士川の章に、維盛の装束に、

其日ノ装束ニハ、萌黄ノ糸威ノ鎧ニ、赤地ノ錦ノ直垂、大クヒハタ袖ヲハ紺地ノ錦ニテ替タリケリ。連錢葦毛
ノ馬太クタクマシキニ、イツカケチンノ鞍ヲヒテ乗給フ。

とある。覺一本は、

赤地の錦の直垂に萌黄威の鎧きて、連錢葦毛なる馬に黄覆輪の鞍おいてのり給へり。

とある。卷十、木曾最後の条に、

木曾ハ赤地ノ錦ノ直垂、小袴ニ唐綾威ノ胄ニ白星ノ甲イクヒニ著ナシ、廿四指タル石打ノ征矢、頭高ニオヒナ
シ、重藤ノ弓ノマン中トリ、白鞆毛ナル馬ノ太クタクマシイニ、黄覆輪ノ鞍置テソ乗タリケル。

とある。傍線を付した所は覺一本と異なる所である。卷十、熊谷父子の装束には、

熊谷ハカチンノ直垂小袴ニ洗皮ノ胄ニウス紅ノ幌カケテ、権太栗毛ト云馬ニ黒鞍置イテソ乗タリケル。子息小
次郎直家ハ、ヲモタカラヒツシト摺タルアイスリノ直垂小袴ニ、フシ組目ノ胄ニ黄河毛ナル馬ニ、白伏輪ノ鞍

置テソ乗タリケル。旗指ハ黒皮威ノ腹巻ニ、三枚甲ノ緒ヲシメ、鹿毛ナル馬ニ乗り給ヘリ。
とある。又盛次の条には、

盛次地体好装束ナレハ、紺村子ノ直垂小袴ニ、赤威ノ胄ノスソ金物、白伏輪シケク見ユルニ、白星ノ甲ニ切符ノ矢ノ廿四指タルカ、銀ハスナルヲ負テ、重簾ノ弓ノ共ニ銀ハスナル持テ、白茸毛ナル馬ニ白伏輪ノ鞍置テ、白轡ニ紺ノ手綱ヨリスケテ、今日ヲハレトソ出立タル。

とある。忠度の条には、

忠度ハ赤地ノ錦ノ直垂ニ、火威ノ胄ノツマ取リタルニ、白星ノ甲居頸ニキナシツ、鶴本白ノ征矢十八指タル頭高ニ負ナシ、所簾ノ弓ノ勝レテ太カリケルヲモチ、金作ノ太刀ハギ、黒キ馬ノ太フタクマシキニ、銀伏輪ニテ遠雁打タル鞍置テソ乗レケル。

とある。覚一本には、

紺地の錦の直垂に黒糸威の鎧きて、黒馬のふとうたくましきに、いかけ地の鞍おいて乗り給ヘリ。
とある。盛衰記には、

赤地の錦の直垂に、黒糸威の胄に……白鶉毛の馬に、遠雁の文を打たる鞍置てぞ乗たりける。

長門本には、「黒革威の胄毛色も見えぬほどなるに、……白茸毛なる馬に遠雁うちたる鞍置て」とあり、覚一本に比してかなりの差がある。敦盛の条には、

萌黄ノ糸威ノ胄ニ薄紅ノ幌カケテ、連銭茸毛ナル馬ニ乗タリケル。

とある。覚一本には、

ねりぬきに鶴ぬうたる直垂に、萌黄の匂の鎧きて、くはがたうたる甲の緒しめ、こがねづくりの太刀をはき、きりうの矢おひ、しげ籐の弓もて、連銭茸毛なる馬に黄覆輪の鞍おいてのたる。

とある。重衡の条には、

三位中将へ、赤地ノ錦ノ直垂、紫糸ノ鎧ニ、村千鳥ヲ白ク打テ射向ノ袖ニソ付タリケル。

覚一本には、

かちにしろう黄なる糸をもてむら千鳥ぬうたる直垂に、紫すそこの鎧きて、童子鹿毛といふきこゆる名馬にのり給へり。

とある。

卷十一、佐々木三郎盛綱の条（藤戸）には、

繁目結ノ直垂ニ、カントリ威ノ鎧ヲ着、五枚甲ノ緒ヲシメ、足白ノ太刀ハキ、廿四サシタル切羽ノ矢、頭高ニ負ナシ、重籐ノ弓ノ真中取り。

とある。覚一本は、

しげめゆひの直垂に、黒糸威の鎧きて、しら茸毛なる馬にのり。

とある。義経の装束に（嗣信最後）、

赤地錦直垂ニ紅スソコノ鎧ニ、鍬形打タル甲ニ、金作ノ太刀ヲハキ、黒キ馬ノ太クタクマシキニ、金フクリンノ鞍置テ、切符ノ矢負ヒ、重籐ノ弓ノ真中取テ。

とある。覚一本には、

赤地の錦の直垂に、紫すそこの鎧きて、こがねづくりの太刀をはき、きりふの矢おひ、しげどうの弓のまなかとて、

とある。後の流布本には、「楯形打つたる甲の緒をしめ、金作りの太刀を帶き、二十四差いたる截生の矢負ひ」とある。かくの如く語りの流伝によりて、次第に変化流動した跡を辿ることが出来る所もある。

能登守の条（能登殿最後）には、

香巻染ノ小袖ニ下ニタウサキヲカキテ、唐綾威ノ鎧着、イカ物作ノ太刀ヲハキ、星白ノ甲ニ大中黒ノ矢廿四指タルニ、重藤ノ弓持テ。

とある。覚一本には、

赤地の錦の直垂に、唐綾おどしの鎧きて、いか物づくりの太刀ぬき、白柄の大長刀のさをはづし、左右にもて。

とある。以上の如く、詞章の流動変化は、日本文学作品においても、注目すべき現象であり、中世文学の一大特質でもあるが、平家物語の本文の流動は偉大な大河にたとへることが出来るのである。又一面において個々の章段を顧みる時、その内容において又かなりの差異のあることもある。こうした場合にその説話的性格を考察して、その新古を論ずることは、本文の性質を論ずるのとは別の性格を有するので、従来の研究者が迷路におち入ったのは両者の混同である。説話の新旧は極めて困難であつて、その本格的構造を分析する他に途はないようである。従つて南都本の異説や十二卷本と異本との差を以て新旧の判定をすることは避くべきであらう。